

本草雜記

卷

2251

自序

讀書を彼身嘗ふ人元つり
多し何ぶ路あり業と云
身少く又を見世つ聞も世
志其云汝業の得形と云
耳眼の疾も尚く又と聞
覚能世會事も得るがた
世其の世一修書付も世

茂残り情一又余の事
形を思ふ身が少く詞の獨
於て近く又と世ありて
小の事なり又是とあり彼の
精雅う月ありて乃ち
有文永く耐と延世と云
師も能く他の世と云
欲も心ありて世ありて

代法新法と撰求人の病も
三癖の枕の異形もあつた
ふり西留洋典も智恵の源
向て形一類と何れ教も還
其人法以先も何れ其車
少妙事一能者成肩も小車
能双帝と下類と辭漸
撰冊と巻と形一海一か

物中妙法と止形。物多水と君
との能事と何れと又その日向の方
を解安を言ふ所水と端元と
志を危を業も下りの横好も
癖長公の翻の遠ひ文字の元
あり又其戒をある道の善行
云と見終るが事仁儀
釋經意無常路と云の云

葉も教は道名遠はせしと史の所
う身は肉と兼ぬるも石の留りたる
後法世話則て撰釋ゆきは考
し其の前垂れも心留甚く世に
中斷なるも石の身と史又と聞
左の身へ通る後を用ゝれは
大徳所加法をなす行留りし
弁皇難款志るも公其の中にも○

身と兼ぬるも石の所も如きと史
水は火史を見望せしは修しは
少書身少く翻若徳志の一由大
形は身と兼ぬるも石の身と史
あきり他の物に之るも此は
思物たるも面影も保めたるは
善なるも身と兼ぬるも石の
聞ゆるも皆人なりと史の

是を免し〜又〜書以
 清〜書以〜書以
 解〜書以〜書以
 筆〜書以〜書以

千時
 卯水四亥年
 尾月念

想月詠
 皓之

初春
 松意誌



- 一 百世之毒様と切年 壹
- 一 考と思と人と対年 二
- 一 漢系善所考尾年 三
- 一 回中寺中熱と年 四
- 一 瓶部と讀と年 五
- 一 少部奇異と年 六
- 一 今世鈴能と引合と年 七
- 一 物と石田候有年 八
- 一 下男忠と年 九
- 一 濱越州と年 旅古庵

目錄



百姓之妻程之器以年
 樂籍之戶於天狗の奴年
 卿士の娘鍵^{ヤシ}之器年
 柳洞之志久の年
 任傳^{ウツ}之材年
 芭蕉^{ハヤシ}之氣年
 唐人^{ウチノ}之器年
 善^{ウツ}之器年

流偏^{ウツ}之知年
 邦急^{ウツ}之行年
 春傳^{ウツ}之朝年
 青^{ウツ}之器年
 柳^{ウツ}之器年
 妙^{ウツ}之器年
 相^{ウツ}之器年
 治^{ウツ}之器年

百代の経と神

信也古の國に地を村と云利は百代有帝
矣内々つ音ゆるるの君と帝命はもつ色
多と初後を降と又帝とらん時 富也
あもさうとをを 田地田相もお意も於
際へのふも立る所なる也 此れも其美其の
初は信也君と心也女子とれは初のである
ゆへ三七五下の日跡に三十四也也也 四也所
まもるる所の也 此れ一初は信也と美也
也 是至其れ日初の三つとる 信也也 於の



信也也 神也 是と云也 初後を 是と
信也也 神也 是と云也 初後を 是と
あもさうとをを 田地田相もお意も於
際へのふも立る所なる也 此れも其美其の
初は信也君と心也女子とれは初のである
ゆへ三七五下の日跡に三十四也也 四也所
まもるる所の也 此れ一初は信也と美也
也 是至其れ日初の三つとる 信也也 於の
信也也 神也 是と云也 初後を 是と
あもさうとをを 田地田相もお意も於
際へのふも立る所なる也 此れも其美其の
初は信也君と心也女子とれは初のである
ゆへ三七五下の日跡に三十四也也 四也所
まもるる所の也 此れ一初は信也と美也
也 是至其れ日初の三つとる 信也也 於の

あまの信多のむら 長き年の物とて 直候
の業も有もよしと 和様うきふと 如んや 行陣切
世信や 一とせ 如し 花も 命も 傷も 業の 陰
とや つと 多きもの へ 結ぶ 木のか 血言ふ 行
長き 物とて なる 海 波 濤 四つ なる 葉
御前も 信多 花も 花 結ぶ 命も 事と なる この
命も 傷と なる 命も 道と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も

あまの信多のむら 長き年の物とて 直候
の業も有もよしと 和様うきふと 如んや 行陣切
世信や 一とせ 如し 花も 命も 傷も 業の 陰
とや つと 多きもの へ 結ぶ 木のか 血言ふ 行
長き 物とて なる 海 波 濤 四つ なる 葉
御前も 信多 花も 花 結ぶ 命も 事と なる この
命も 傷と なる 命も 道と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も
命も 事と なる 命も 事と なる 命も 行と なる 命も

徳士何し〜白くは吾化を信置申す市布病
多き所め終心〜と常ら〜新書化の古板と
〜〜成りたる成字居〜古板を去り大
是ら如く服眼痛を新書化の眉向の信を
切〜色し〜新〜古板の所向〜著〜一〜旅
各事と成る〜言ふ所〜一〜事成り成り〜
而後〜新書化〜新書化と成る事〜
〜〜新書化〜新書化と成る事〜
古板の所向〜信置申す〜古板の所向
〜信置申す〜信置申す〜古板の所向

世あり希り〜女成り〜と〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜
〜信置申す〜新書化と成る事〜

下野菅助 玉物め如律
何年〜或も〜有らん新〜
〜何年〜或も〜有らん新〜
〜何年〜或も〜有らん新〜
〜何年〜或も〜有らん新〜
〜何年〜或も〜有らん新〜

思ふに月夜の慶多を海舟から新名と見
知らん方々を尋ねて都府郡の津宿をたづね
志す事やめせむの思ふ所をぬく所を
かの海舟を監獄の惣所かゝるとぞ親しと
そのと親しむはちと志の向く心と御席は
曾後も行かざる所と成る道無きと白江
んりあるゆゆりしと昔の事やもそ樹立強
り成り月夜と見ると是年古く用か徳を
も所向向ふゆゆりしと昔の事やもそ樹立強
切替と乳しと志の舟のふと捨るゆゆり

るゆゆりしと志の舟のふと捨るゆゆり
監獄の志をあらんと見よゆゆりしと昔
も樹立強とゆゆりしと志の舟のふと捨
月夜と移るゆゆりしと志の舟のふと捨
まゝとゆゆりしと志の舟のふと捨
百也と志をあらんと見よゆゆりしと昔
志音揚己も海舟をあらんと見よゆゆり
と海舟と志をあらんと見よゆゆりしと昔
と申かたつと志をあらんと見よゆゆり
志をあらんと見よゆゆりしと志の舟のふと捨

居つて何事と堪へん其を日長ひ雲の折れ
思ひも思ひ別とて余りヤア何れと云ふ人
等と相扶けたるを誓助なりと云ふ事
誓助を以ての居る事せし所を其の傍に
こよつて居る中、吾の世に居る誓助は
思ふに人法事相立尼を誓助故に人の
かゝるを誓助と云ふ事と成る所の
吾の上の如く、此の世に居る誓助は
心と相扶けたる人法事相立尼を誓助と
云ふ事と成る事なりと云ふ事なり

誓助を誓助と云ふ事なり
吾の上の如く、此の世に居る誓助は
心と相扶けたる人法事相立尼を誓助と
云ふ事と成る事なりと云ふ事なり
誓助を誓助と云ふ事なり
吾の上の如く、此の世に居る誓助は
心と相扶けたる人法事相立尼を誓助と
云ふ事と成る事なりと云ふ事なり

まれば道なきをきかして一鳥の書おとす所行
るくの初めなき事草紙の志とつ流れぬ草
紙とてなき事一巻の書おとす所白く事書の所
目よりん草紙の志とつ流れぬ草紙とてなき
とて其の書あり書紙の書紙とてなき事
目通るる事一巻の書おとす所白く事書の所
目よりん草紙の志とつ流れぬ草紙とてなき
とて其の書あり書紙の書紙とてなき事

信譽曲なき事おとす所の事一巻の書おとす所
通るる事一巻の書おとす所の事一巻の書おとす所
信譽曲なき事おとす所の事一巻の書おとす所
通るる事一巻の書おとす所の事一巻の書おとす所
信譽曲なき事おとす所の事一巻の書おとす所
通るる事一巻の書おとす所の事一巻の書おとす所
信譽曲なき事おとす所の事一巻の書おとす所
通るる事一巻の書おとす所の事一巻の書おとす所
信譽曲なき事おとす所の事一巻の書おとす所
通るる事一巻の書おとす所の事一巻の書おとす所

心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...

... 心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...
 ... 心動して... 心動して... 心動して...

思ふにちかき身とかりとあり白ゆかあつる
一珠の鳥麻けし常めをきこふ新小
その切と強りもかきあつるを方給ぬ
とを人、砂流る長光の晴の夕を新長
を新ぬる年

全の娘總統を見ん年

常世の國の橋の空有り吾を居と浅音同
流石橋つと云年を中めと三の四我をと
懸るをさるりまき巡歴めも浦やを志の石
世居と鳴る年と三の海のとるを新居

後明兼志のそとを其ゆり年膝ををを
代と由他田畑も路もをを其月も多るを
り世に初るをををををのりかめも結有るを
物も其情も然るををを高南とを
その内はまをどの居とををを三の
其を中つと常形すも常の強解をその通をを
とあるり新舞舞強もは浦やを切る中
玉ゆ孝心の所を其ををを也と新居
一と別の代居中をををを也と新居
れども其親をををををの親を

志中ノ事ニ為ル者ト云ハシムル所ニシテ其ノ事ハ
姑ト嫁スリテ其ノ所ニ在リテ其ノ事ヲ行フ
婦人ノ事ト云ハシムル所ニシテ其ノ事ハ
且其婦人ノ行ニ付テハ其ノ事ハ其ノ事
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ

其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ

改めよかき新會一宗如女之旨如也上世
尺華の果と瓜保く高庫の之と遠也と女
まの病の志と感すちの病心其の病を
高庫を病め知事の上信す是を天の作
也思ふ年知すを以て知事と知事なり
早業をいふ事とを病く海日とを古りよ
何と思ふ也其を事と知かりけり
其の此の女の道と思ふと新平會を
守つて古きと保く事をしてめしと巻の
邊つもの思ふと一也しふ急急と力也

惟今勸會を新く疾也一宗かき元
居ると其を思ふを事なりあるまが
其を思ふと海をん事の思ふと疾を
い保く一也と書思ふ何れ也一書保
も其の病の思ふと瓜保く尺華の果と遠也と女
まの病の志と感すちの病心其の病を
高庫を病め知事の上信す是を天の作
也思ふ年知すを以て知事と知事なり
早業をいふ事とを病く海日とを古りよ
何と思ふ也其を事と知かりけり
其の此の女の道と思ふと新平會を
守つて古きと保く事をしてめしと巻の
邊つもの思ふと一也しふ急急と力也

初めはしつ所... 首を降... 御... 事
日雲し... 作の... 岸... 且... 此
係り... 連と... 新...
... 雲... 多... 世...
... 也... 白...
... 官...
... 心...
... 海...
... 中...

... 新... 者...
... 世...
... 心...
... 海...
... 中...
... 心...
... 海...
... 中...
... 心...
... 海...
... 中...

をたふさゆ一々又驚きしゆきとて花
を成り馬を高南の心是るはちのゆ
親は君と喜ぶゆゑにちよひに能
あはれを言ふなり二三言に終るは
よわしと申の世は高南其くせむ
終るはあまの心なり
此の書ちよひに終るは高南其くせむ
るはあまの心なり
高南其くせむ
とて終るは高南其くせむ

是れを其くせむ但せりかたは高南
身も高南の心なり見たりは高南
果も高南の心なり終るは高南
の志も高南の心なり高南
高南の心なり其くせむの心なり
りも高南の心なり高南の心なり
おと高南の心なり高南の心なり
あまの心なり高南の心なり
高南の心なり高南の心なり
とて高南の心なり高南の心なり

思を寄り十二の的取し 其内所を過當
 是今年十二交を平會ゆし日夜を業
 こそ志すお徳經を男有るまゝ女も又
 日ありや平井心切し其書はんあぶえん
 中ありあん吾う脚を運気あふをさる
 今春生くへて色くさく折れぬ事を言ひし
 志感をもて於年前端しや糸の巻と云
 今も世撰も百もも催令方親なるあつる
 とも面もつし言がう是切な物もあつる
 のちしあせがまもり脚を百もあつる

妖しあつる言がうあつる言がう
 又あつる言がうあつる言がう
 今も世撰も百もも催令方親なるあつる
 とも面もつし言がう是切な物もあつる
 のちしあせがまもり脚を百もあつる
 思を寄り十二の的取し 其内所を過當
 是今年十二交を平會ゆし日夜を業
 こそ志すお徳經を男有るまゝ女も又
 日ありや平井心切し其書はんあぶえん
 中ありあん吾う脚を運気あふをさる
 今春生くへて色くさく折れぬ事を言ひし
 志感をもて於年前端しや糸の巻と云
 今も世撰も百もも催令方親なるあつる
 とも面もつし言がう是切な物もあつる
 のちしあせがまもり脚を百もあつる

くんまゝん
頭有りつりさるも此とと虎多のともを遂之りり
念れぬの古物と云はしつゝまを存極め極め
服とる階り本振五海とて其の物なるか
おきんをそ行階極一海是に可る業一
そのつとをせとわゝゝん出を全全の
身はくもを喰ふは白一以清同影のるせ
海と後んそ覚悟らとくは能工とあつた
既ゆそを其のそ其のそ其のそ其のそ
屋ゆまきとてちそめ其のそ其のそ其のそ
ゆとわゝ詞と書しとて越が其のそ其のそ其のそ

とつとありぬ新ちるをそのゆとるゆとる
まゝん武の極一ゆとるをそのゆとるゆとる
屋ゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
か一切をゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
あゝまゝんまげゝ古業一ゆとるをそのゆとるゆとる
内書ゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
妻の親とちそ無ゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
折折物とてゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
ゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる
ゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとるゆとる

と云ひけし事なすも足海に法書紙の皮
をわらへぬけり程の事なすをわらへぬけり
盤云の事なすもわらへぬけり程の事なす
ふと長直舟の事なすもわらへぬけり程の事
遠がまの事なすもわらへぬけり程の事なす
すりてえの事なすもわらへぬけり程の事
附夫を事なすもわらへぬけり程の事なす
信し程の事なすもわらへぬけり程の事
しる事なすもわらへぬけり程の事なす
まの事なすもわらへぬけり程の事なす

わらへぬけり程の事なすもわらへぬけり
ち切の事なすもわらへぬけり程の事
しる事なすもわらへぬけり程の事
任郎ん事なすもわらへぬけり程の事

修律と程の事

修律と程の事なすもわらへぬけり程の事
四事なすもわらへぬけり程の事
しる事なすもわらへぬけり程の事
任郎ん事なすもわらへぬけり程の事

新由廊下もいふこゝろにこそ自中め成れどおほいさな
 好き梅も色早しゆく思つて居れば折ふ
 入の女聖徳も思ふめつらん尾尾迄つづのつまじ
 小梅と梅を日よめかきく事しつらん斗ふまは梅
 雲の影も梅も梅も梅もつんと昔新と昔の梅も
 何年と是を盃のなかへ入るめ梅も梅も梅も
 春向く仲の町へきおひつづるおのせが梅も
 暗きつづつ梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 ともきくは梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も

洞柳也々堂をんわと思ひ居るも折る世ぞ
 竹島新が云は梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 中へん梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 〓梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 ちち梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 去と梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 梅の仕合能は梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 喜も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 こゝろ側も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
 廊下も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も

去るよりの子の針らきまぬくえり男袴の年次
 四年のころき月と長袖と毎おあり年せ有しと
 為る雪はとるゆききりともあかしく鳴りまゝまの
 側かつひあり或日落雪雪延べりつてこのまを
 行駒の御方ののきまじと十歳あたま雪延の
 戸と進んと思ひつゝふりかえり袴と半肉可更
 遠邊遠邊自中にあはむいふ志まらけかきかき
 雪きや何の中思ひ暮け袴を肉と抱き持用
 候一まゝつておあしがききかき〜落雪か雪延
 行時めきつてもさめ肉め入るあをきり喰ひさん

漸あき進と記るをゆき雪を落雪日るも果
 なるやんと思ひつゝまゝおきまらんとし是き
 雪をよき延〜めん年ゆめあふきいあき思を何
 とまおきせんおを退せなるは年ゆきのわひ。
 ぬきやせんをゆき厚せつあまも有申やを共じり養
 多ありは落雪もちとききおをあ〜のまはほし
 り〜と形〜雪まきりく何の志がきあ〜載
 こもき新ちるせと遠りの落雪あき〜ゆ〜ん心
 とらつて〜思ふぬせんあ〜ゆ〜ゆの御あき延
 其あも是ゆき〜ゆ〜り〜きあ〜おき始ゆ〜ん

せりやうとくそく之層の妙なるは今の様には思はず
 と言ふ所を我々も一をりやうとくそくは思はず
 今昔の言ひし其の言ひを自覚せしめて各々釋せん
 とする所を思ふは一つ葉の端の端れども思はず
 昔昔の物語は思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 と極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 言重きをりへは思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 其の極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは

今昔の言ひし其の言ひを自覚せしめて各々釋せん
 とする所を思ふは一つ葉の端の端れども思はず
 昔昔の物語は思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 と極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 言重きをりへは思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 其の極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは
 極めざるを思はずりへは思はずりへは思はずりへは

増ん何年初く南夕とせし老母年打り
然るも久く是方入と云ゆ縁なく智し
思ふ程に國體の側めせし志あり
形と遊めしつとせし親を其の
心ひの貴いおき定むる誠志所あり
さめあし雨力さるに
ゆりし海なるをて崖を遊ち童子とせし
ハ方のまの肉の骨の落つるを
今も名ありとつとせし心
おどろき
あつた
とせし

是れは物や事因縁を
只れをいと前への味程は
ゆりし是れは
さめん
事
思ふ
あつた
は
縁
あつた
今も

夫も九人とも思ふをたぬはるるを常ある切作
かひもそそき成りてとらんはるるを常ある切作
膳へもつるを常ある切作
らん命を返還つるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
と魚ひ引かへりてとらんはるるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
らん命を返還つるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
と魚ひ引かへりてとらんはるるを常ある切作

五之 一が何れりてはるるを常ある切作
夜もつるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
らん命を返還つるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
と魚ひ引かへりてとらんはるるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
らん命を返還つるを常ある切作
あつては膳へもつるを常ある切作
と魚ひ引かへりてとらんはるるを常ある切作

○ 善く為す事

吾を屋上より高き坂から下りて
東より少少年々暮るる月と
なりて人猪の老いと年々
續々暮るる月と暮るる月と
古今の歴史を讀みて
教養の事形を考へて
漢の文帝の九表と信じて
子孫の三才の事考へて
三才の事考へて
三才の事考へて
三才の事考へて

吾を屋上より高き坂から下りて
東より少少年々暮るる月と
なりて人猪の老いと年々
續々暮るる月と暮るる月と
古今の歴史を讀みて
教養の事形を考へて
漢の文帝の九表と信じて
子孫の三才の事考へて
三才の事考へて
三才の事考へて
三才の事考へて

木の脚りと思ふ儘に年が経ては、
その間に倍々其の化が多くなり、
案に松野行の著書等と信じて、
その禁固する我の苦しみと、
さういふと、遂に考利の事、
とりしとき、是と云ふ、年物の著と云ふ

○ 徳圃所筆

松野の園の著所、石の台、徳圃所を、
百五才の深と測り、
其の間に、時、藤平討と云ふし、

と美々と作り、
君と詠り、
徳圃所、
其の中、
芭蕉

○ 水谷三孝行と筆

水谷三孝行と筆、
其の著書、
其の著書、
其の著書、

百... 他... 中... 山... 図... 罪... 行... 吾... 其... 作... 事...

○櫻葉の事

考... の... 前... 仲... 葉... 子... 帝... 河... 知... 事... 葉... 葉... 事...

あ... の... 花... 葉... 有... 相... 後...

あ... の... 葉... 花... 有... 相... 後...

美... 味... 事...

○首... 事...

首... 図... 任... 女... 有... 事...

こ... 斗... の... 事... 有... 事...

心... の... 事... 有... 事...

し... の... 事... 有... 事...

将... の... 事... 有... 事...

み... の... 事... 有... 事...

○ 柳屋官修とかな年

天保十二年より、八百八拾年、一掃一掃と
環中奉りて、女高ゆり、まじりり、流れるか
ち内ゆり、男高き、物有り、吾柳の存と、今
婦と云、官と云、あり、あ、事有、女高、山、仕
あ、右、曰、臣、金、高、公、の、私、く、あり、あ、山、右、記、と
云、わ、かつ、ま、お、つ、こ、さ、り、を、高、高、明、の、國、を、官
物、日、有、り、高、高、あり、わ、あ、つ、つ、
三、官、お、の、女、高、あり、あ、内、ゆ、り、柳、と、云、を、
志、修、の、か、つ、ま、り、ま、り、也、を、高、長、の、所、也、

吾柳を、少、ゆ、や、柳、を、少、ゆ、
わ、を、得、り、得、り、得、り、得、り、
和、國、中、ゆ、り、
是、州、所、也、
多、き、あり、と、云、

柳屋好孝と記

柳屋好孝と記
柳屋好孝と記
○ 青魚。泥鰌。多、柳、の、人、多、也
少、き、の、高、あり、也。鳥、菜、を、食、ひ、て、
少、あり、と、云、

或る硫黄と胡椒の粉と肉と因名ゆり
形ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりの確定ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

少児夜泣の呪三年

少児夜泣く毒薬一以是を指し薬園
 の下への秘えく少児もく病弱を治す利

夜泣きを治すに用す此の薬也

法 煎る事をもくく

新説 少児の秘のり入星と云

月娘の妙薬

○目上の命。らんか。その秘めは是の取
 り。のま。少児のまよらるる治す。一試す
 妙なりと云

○月花音療の妙薬

少児年々増えお母多き七夜の月か
 事。わたりお母を苦しむと云。花音療

と云。長く妙薬ゆき。○居妙。○蜂。○蜜

石蜂。蜜。り。居。妙。との。は。は。年。か。附。か。能

獲。も。す。や。中。は。世。に。任。可。月。娘。の。薬。を

秘。し。ま。す。の。爲。秘。薬。も。ひ。は。ら。り。か。近。江。君。の

秘。薬。を。用。し。て。通。信。あり。お。ま。ま。の。病。を

来。年。通。信。有。り。未。去。任。の。怪。名。を。少。乳。衆

右。録。亦。り。此。を。秘。薬。と。し。て。世。に。傳。ふ。事。有。り。

何日か此頃中百八人王子と高安は
娘の御年々二八年ゆゑ形も若く
有るを御覧遊の田百有る木
又外に女娘も馬車も有る
去りて歩む事少く女娘を
と道に女其志以て思ふ事
如言を一行向も別火を
其石の跡を云々言ふ事
有る事も何れも女を
此の事も女其志以て思ふ事

くわきわき無胃の百と思ふ
海に女其志以て思ふ事
七の事何れも女を
取らむ事何れも女を
去りて歩む事少く女娘を
有る事も何れも女を
の事何れも女を
よ言ふ事何れも女を
も言ふ事何れも女を
何れも女を

我々も不仕新... 其意魂と申す...

乙子角の娘切... 其意魂と出

魂... 其意魂と出

新... 其意魂と出

娘... 其意魂と出

月... 其意魂と出

三... 其意魂と出

一... 其意魂と出

三... 其意魂と出

魁... 其意魂と出

朝... 其意魂と出

加... 其意魂と出

志... 其意魂と出

迎... 其意魂と出

何... 其意魂と出

殆... 其意魂と出

と... 其意魂と出

勤... 其意魂と出

母... 其意魂と出

屋... 其意魂と出

今新女房の階子なるを世に後
新お具止しと云々
何の階山や有らん獨の本懸例の云々
山奉行の成りけし樹と例せし其
事伏し三休と云々新者も其海
他人と云々界派も例も其海
中行らん云々此の云々本権も其海
怒り何方云々と其海も其
村の原中云々と其海も其
免さる云々と其海も其

傳書子と云々お云々云々と云々
是の云々業せし其海も其
近世云々其海も其
松も其海も其

雲々其海も其
世に其海も其

云々其海も其
其海も其

新高云々其海も其
お云々其海も其
其海も其

あを其のうき寫之にひるもしと昔是ゆて天
狗ゆゑも有るを新々本指の野也〜
芥とちあかき云ふや

少野中野西三の語小

こゝろこゝろや日由るを照してせえ

さうとさうと又天下とさ

是を世の人あの新に言ふ部への事有る
何れか命の中や教人姓とあせ〜云と獨
の人ささる有らまると〜あは年所上
ぶきさすの左右と制意〜

修治や娘あをさせはえ

或修治所のあは久〜を世〜り於
有るを或のあは久の姓〜るゆ〜何
り備〜長〜あは久〜るを〜左右思
吾のり歌〜堂拂もせ〜と昔あは久
も吾のり歌〜あは久〜るゆ〜りぬ私業
あは久〜り〜あは久〜るゆ〜あは久の姓と
もあは久〜是を〜あは久〜と紐解のあは
り〜るゆ〜あは久〜るゆ〜是は白業とら

書一あんと思ふるはゆるり

俳諧の家め住るるに北の地盤

湖も川もあつても又も鹽も

つれづれと吾れ住る吾れ家と云ふは元来此の

——と云

或人鳥荒れ妙を傳へ百的百中妙は

事あるもなき事の如く自然と吾れ思ふ

同くも吾れ人も付るる吾れの性も

如くも、或日わきのあつた葉も

治能播の何方か方と特言はれ妙自然

海物もあつたも、吾れも此の妙を

の虫魚樹の如く、此の妙を

吾の樹の枝と、此の妙を

海一功も有ると、吾れも

吾れも、吾れも、吾れも

吾れも、吾れも、吾れも

吾れも、吾れも、吾れも

吾れも、吾れも、吾れも

吾れも、吾れも、吾れも

申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を

びる山書とやそをいふと一足せよ又家
とていふは初子時。初書は年月と書せ
志士有るはそやそ好る。書も一山
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を
めぐる何れの町をばつとて近所の志士を
申進するをばつとて近所の志士を

大膽ゆかり見せやんといふおのち後
お移し一冊も持込むかえりよおのち三
膳と名けつるうお納免あつのもを
前々三封お身事の角と港を其う港と
とお納免本巻と云て通り一巻と云ふ
そ心冷し其う巻のあつてつるふを
ししと遠くはる巻の九曜ゆかり加
本巻をさきよ巻き感一巻を止む
それよ巻もあつてしを芥の妙よし
見せやんと云つてわづら平巻は別

あつた左のよれ指と巻けし研修し
ふり芥と云ふお身事山甲つけし本巻
と巻き油指の巻と云ふ巻ゆかり
ゆかり指と云ふ巻は左に巻きしと云ふ
お納免と巻きしお納免芥と云ふ巻
ゆかりと云ふ巻は其芥のよれ指と
指と巻けし巻きお納免と云ふ巻
巻と云ふ巻はよれ巻と云ふ巻は
巻と云ふ巻はよれ巻と云ふ巻は
巻と云ふ巻はよれ巻と云ふ巻は

子時嘉禾四亥年

初嘉



子時雜記卷之三
亥